

ZOOM▶

写真劇場

## なよ竹の記憶

エッセー 須磨久善<sup>すまひさよし</sup> 写真 大出一博<sup>おおいでかずひろ</sup>

竹林を吹き抜ける風には特別な香りがある。

幼いころの夏の日、仲間と川遊びをした午後の帰り路、ひとり野道から逸れて竹林に足を踏み入れた。きらきらと照りつける太陽はこま切れの光の矢となり、ざわざわとゆれる竹の葉の合間を飛び交う。身体に纏わりついてた熱気は消え去り、ひんやりとした風が頬を撫でる。突然、自分が異次元の世界でひとりぼっちになってしまったことに気づいた。周りには誰もいないのに、たくさんの目で見つめられているように感じる。しなやかに揺らぐ竹の間を緑の妖精たちが飛び交う。目がくらんで息苦しくなったとたん、あの香りが鼻をくすぐった。孤独の香りだ。

三十歳を少し過ぎて京都にしばらく住んだ。春になれば桂離宮に近い自宅から物集女街道を車で走り、朝掘りの筍を買いに行く。地面からまだ顔を出していない白子筍なら刺し身で食べる。大きい筍はざっくりと切り薄味で煮て、削りたての鰹節をからませ木の芽とともに口の中に放り込む。口にひろがる筍の甘さとともに、もう孤独の香りは消えていた。

風光明媚な古都の数々の名所の中でも嵐山の竹林の美しさは格別だ。ひとり青竹に囲まれて竹取物語の世界に身を委ね、光り輝くかぐや姫に思いをはせる。この写真のかぐや姫はいつ光の国に戻ってしまうのだろうか。

